

# COSMOS集



早ければ十日で治ると聞きたれど五十日つづく突発性難聴

鴨産卵す 小島 りき子\* 神奈川

時間かけ梅ジャムらつきよう漬けつくる梅雨にふりこめられる日々には  
紐集め作りし小さき巢の中に鴨産卵すまだらの四個

二週間で生れたる雛は全身を口にし必死にのびして餌欲る  
父鴨はお義理のように母鴨は念入りに皆にえさをやり呉る  
巢の縁に立ちて二、三度羽ばたきし生れて七日で飛び立つ雛よ

百年の歲月 人見 江 一\* 神奈川

旅先の消息伝える絵葉書を挟んだままの古本を買う  
紫陽花の移ろう色を楽しみに向かう鎌倉、六月歌会

富士山の伏流水は百年の歲月かけて柿田川に湧く  
産み終えて大き甲羅を引き摺って海へと帰る母うみがめは  
麻雀もゴルフもせずに多数派に与せず進むこれから先も

過去完了 奥 浩 昭 東京

長野県山形村の野沢君と新宿で飲む十年ぶりに  
朝なさな乗鞍を見るその村に君ははや十三年を生く

吉祥寺の小さな塾で君たちに(過去完了)を教へてゐた日  
経済を学んだ君が悩みつづ選んだ仕事(看護師)といふ  
病院の庭で病室で病む人と向き合ふ君の三十五年

松尾 祥子選

「あすなる集」特選

夏のれん 多田 美慧子\* 宮城

歌会終え石橋屋へと急ぎたり百三十八年の店を畳む日

石橋屋仙台駄菓子夏のれん五月の風に翻るなり

ダルマあめ、青葉しぐれにうさぎ玉小さき菓子の名前ゆかしき  
商いを見届けたるか店の奥仙台四郎が客を見送る

買のおきの駄菓子に迫る賞味期限店なきのちも時は流れて

清書をはじめ 尾形 久子 群馬

「G7が軍事同盟であつてはならぬ」被爆せしひとの深き目差し  
四つ辻を行き交ふ車みはるごと首振るカラス標識のうへ

白小菊とアガパンサスを活けこみて詠草十首の清書をはじめむ  
たはやすく写真の撮れるケータイよけふの被写体は十葉の白

原賀 瓔子選

パスポート 清水 佑太郎\*東京

本買える程度の稼ぎになつたけど時間がなければ文字は追えない金がないときには時間だけはある図書館という居場所もあった「ネット上には情報なんてない」そうだね君の人生ではね世の中が進むスピードはこれぐらいパスポート申請の二時間パスポート受け取り口に置いてある『ゴルゴ13』読んで待つてる

千 秋 和泉 邦子 新潟

千秋は美しい町初夏の緑の中を美術館へ行く  
展示室独り占めして「雪しまく」の画のまへに坐す横山操展  
楡の木は学舎のなごり図書館の行くさも来さも見上げて通る  
豪華本コーナーのある古書店に昭和の文学全集ならぶ  
三年余の配本の終の詩歌集唐紅かづねなるの表紙あたらし

窓 明 かり 磯 貝 恭 子\*新潟

梅雨の夜の玄関に家守ひとり来て去年と同じ彼女と思う  
それぞれの営み映す窓明かり見ており一番好きな夕闇  
スマホにある猫の写真の何枚もの最後の写真は小さき位牌  
十七は猫にとっての大往生わたしの猫のその時思う  
胸にあるナイフを人に見せぬよう傘深く差し職場へ向かう

旅 ち かし 折笠 瑞 枝\*新潟

朝刊のちらしの裏紙まっ白はうれしかったなよく絵をかいたかたつむりにトマトあげれば赤いふん 大はっけんを子らは知らせる  
菌科大の壁によりそう自転車はしなやかな背をそらせて並ぶ  
旅ちかし残りの食材とり出してパズルのごとく献立きめる  
与板町商店街の軒低く(よいいた)の幟はやさしくゆれる

街 を 向 く 高 橋 梨穂子\*新潟

うんちだと思うにおいもシテナイときみが言うならさみを信じる  
歌にしてようやく他人にいいねって言われる程度のささいな暮らし  
一筆箋一枚ぼつちに書く愛の言葉のために数年かけた  
飛びながら鳴くカラスいてさみしいとつぶやいたってさみしいままで  
ドーナツの穴が穴ではなくなつてそろそろ梅雨入りする街を向く

斉藤 梢選

答 え 合 わ せ 柴 田 有 里\*愛知

四年ぶり咲いたアジサイ避けて干すタオル十枚梅雨の晴れ間に  
雨上がりクチナシ開く練絹の白き花びら露を湛えて  
六度目のコロナワクチン受けないと母は大きなバツテン示す  
三年の月日で得た物失せた物答え合わせはこれから始まる  
正常で異常で非常だった日々 消毒液とマスクが残る

草 魚 小 野 久美子\*兵庫 庫

のつぺりのなまずのような顔で言う「鯉じゃないんだ草魚ですけど」  
濠ばたの草魚の群れがほどけゆく餌のなくなれば餌のある方へ  
土の上にふりかけのごと散っている額紫陽花の小さな花よ  
道に迷うことも良きかな塀をおおう木香薷薇の咲く道を行く  
しめりけを帯びて流れるオカリナの音が床をはうまじろみの午後

しあはせの証拠 藤 本 満里子 兵庫

農道をゆつくりと行く田植機をバイクの列が追ひ越しゆけり  
人波よりとび出す子の頭目で追ひて地下街を行く阪神梅田の  
しあはせの証拠のやうにランチさなか写真にをさまる息子家族と  
いつせいに黄色の帽子の園児らのあいさつを受けたちたちとなる  
できぬこと失ふことの多けれどまろやかな古酒のごとくありたし

母の青春 桜庭 さわね 鳥取

ひざの上にランドセル置き小二女子教科書めくる待合室に  
運動会孫の姿は見つからぬままに演技は終はつてしまふ  
エネルギーの無駄と従妹は笑ひたり夫婦喧嘩の理由わけを話せば  
母の桐タンスの底に見つけたる父からの文 そのまま仕舞ふ  
七十年タンスの底に仕舞はれし一通の文母の青春

思ひの丈 樺 か乃 広島

サイコロをふつて決めたいことばかりがなじがらめの広島駅前

ゆつくりと葉桜ゆるる 一抜けて二抜けて過去に陽が射してをり  
誰でもいい絡み絡みて生きゆかむヤイトバナ今はジャスミンの中  
やうやくに消しゴム見つかかり走り書きの思ひの丈を丁寧ていねいに消す  
私への文鎮ならむ独り身の部屋にどかんと仏壇がある  
小田部 雅子選

飲むんぢやないよ 高見 艶子 愛媛

入眠剤飲むを見し子がそんな物飲むんぢやないよと語気荒く言ふ  
兄四人姉らに残されし吾のかく冷ゆるがの晩年を生く  
従姉妹住む母の実家は予科練の叔父の遺影を誰も知らざる  
もう何年わが為にバラ買ひし事無きを思へり老いは淋しき  
臍臓へらに傷があるとふ老齡の吾が臍の字に卒ある不気味

モヌケノカラ 山崎 常子 長崎

ロウジンクラブ会長を退きケイタイも切りてなりたりモヌケノカラに  
〈合理的〉贅肉がない妹にかつて言はれし言の意おもふ  
今にして鋭き批判と思ひ知るやさしく言ひし妹のことは  
父母からも兄姉からも一度だに注意されずに生きこし一世  
動物を飼ふは嫌ひなこのわれを猫は知らずかときに訪ひ来ぬ

靴 音 川越 三紀子\*宮崎

ワニ柄の筒から出てきた賞状に私と友の旧姓がある  
五十年筒に秘めたる賞状は小さなテニス大会のもの

採点に余念のない子が顔上げて蟬かと尋ねる螻蛄おけらの声に  
電話越しの子の靴音がかかる余裕無さげで忙しそう  
頼みますと頭下げたくなりそうなる立派な家守と玄関で会う

泉 芳 朗 福 清 千美子\* 鹿見鳥

海も山も霧につつまれわが里は水墨画の景六月の島  
奄美の復帰七十周年「復帰の父」泉芳朗いずみほうろうの行跡語る  
民のため真夏五日の断食せし奄美のガンジー泉芳朗  
坂道の崖の薄闇のほり行き石垣内泉芳朗家跡



木畑 紀子選 「その二集」特選

いのちの波 水鳥葉子 茨城

梟の鳴きある夜はむらさきの闇を濃くして銀河ゆらめく  
すこしづついのちはがれてゆく猫を抱けば鼓動は荒波のごと  
愛猫のいのちの波が立つてあるゆるく大きく引き潮となる  
かなしみの鳩胸にゐて夜更けにはくくくくくうとを鳴らせり  
満月が磨かれてゆく風の夜 理科室にある分銅思ほゆ

読みづらき旧漢字なり急ぐまじ辞書を頼りに楽しみゆかむ  
お前だったのか 丸山克介 鹿見鳥

『こんぎつね』今も胸打つ兵十の最後の言葉「お前だったのか」  
足指をしきりに洗ふ爺のをり春から夏へ変はる銭湯  
オオワシの親分ほどのセスナ機が霧島連山横目に飛び立つ  
ぐらんぐらんユニボ五月の風揺らし空家やうやく更地となりぬ  
雄二羽のけんかの隙に雌の鳩飯粒残らず食ひてしまひぬ

シャンデリア 一谷川 恵崎玉

本物のガラスだらうかシャンデリア 偽物の火は火よりまぶしい  
シャンデリアは落下するとき花びらをひらくだらうか万華鏡のやうに  
天井を見上げるうちに色薄くなりたりインドの茶葉のアイステイー  
今日はよく眠れますやう祈りつつぐうるんぐうる耳を引つ張る  
父の記憶失はれゆく三度目の夏 あさがほは今年も蒔きぬ

水 分 補 給 渡 辺 繁\* 千葉

野仏のお地藏さまは新しきカッパに着替え梅雨支度せり

真夏日は水分補給が欠かせぬと一理の浮かび立ち飲み屋に入る  
梅雨いさき入梅いわしの刺身買ひ冷酒も買いて帰路のたのしさ  
古代史の本積みあがる今日もまた中身似たるを買いてしまえり  
古代史に諸説の多し参考書読めば読むほど闇深まりぬ

かなしみの度合い

谷

真 樹\* 神奈川

ななかまどの樹に依存するやまふじは左巻きにてからみつき咲く  
能登の海わたる風うけクルールのストロークする風力タービン  
眼前に父の故郷の海ありて沖へ沖へと運ばれる過去  
巖門を入り浸る潮あおおとかなしみの度合い水底に見る  
逆しまに白山連峰うつりこむ雪どけ水で満たされた田に

たんたららん

宮

梓 一\* 東京

きみが茹で潰してこねたじゃがいもに衣をつけて揚げるのが僕  
爆笑の絵文字みたいな顔になる酸味強めのネーブルオレンジ  
独身のころ食べていた店からのメールがいつの間にかスパムに  
ひとりでは使い切ることなかったなドレスシングをまた買いに行く  
たんたららんたつたつと口ずさみ油が光るバットを洗う

水上 比呂美選

一杯の酒

佐藤

弥生 新潟

長等山ながらやまトンネル出づれば近江の海ダイナープレヤデスでビールだ  
さざ波の比良の大わだ夢のうちに列車に揺らるる午後のひととき

三国峠越ゆることなくコロナ禍に籠りてゐたり若い人われは  
那須、磐梯、安達太良、吾妻、蔵王山 車窓に献ずる一杯ひとつきの酒  
コロナ禍に「フライベート花火」打ち揚がり今宵は赤きハート輝く

翔平の横顔

権田

陽子 静岡

青山椒ふちりとかじり口中は仕置のごとく痺れたる夏  
まひまひの這ひたる跡がゆつたりと白く乾きてカーブを描く  
茉莉花まりりくわの葉を食ひつくし芋虫の四寸の体軀に神気みなぎる  
畦道やでこぼ道消え失せていつしかヒトの足の衰ふ  
観客の心を奪ふ翔平の横顔ダビデの彫像思はず

水の檻

池田

あつ子 愛知

ほほけ立つ茅花を過ぎる風に言ふわたしもけふは風になりたい  
遙かなる旅へ発ちゆく蝶たちに季節の風が行つてらつしやい  
六月のカレンダーには祝日の赤い数字の無くて梅雨入り  
平凡な日常破るアラームはなんども何度も「避難指示」告ぐ  
わが街が否応無しに入れらるる線状降水帯といふ水の檻

ライオンのあくび

小田

沙也加\* 愛知

水槽のガラスはどうやら分厚くてすんなり消えた破壊衝動  
一匹で遠くを泳ぐペンギンが私に見えてなんてありきたり  
値上げた入園料を払いつつ切り出せないのは将来のこと  
ライオンのあくびの写真を撮りながら新規性とはなんなのだろう  
反抗期なんて無かった園内でやたらと飼育されている亀

貸し眼鏡 深沢泰二 三重

つゆ寒の夕べひたひた組長が小さき箱持ち町費を集む  
水旗はためく路地に猫ねむり剃り跡青き修行僧行く  
かなしみも怒りも青田来る風の役場に古りし貸し眼鏡三種  
いまも噴き出す郵便局の冷水機下校のすらにとりかこまれる  
梅雨日ぐれ小さき小さき遊園地恐竜の目の青く光れる

津金 規雄選

放物線 新 敦子 鳥取

カメムシのかじりし米は無農薬のブレンド米よ 選りすぐりなり  
葉うらなで隠れあをむし見つけたり糸くづのごと丸まり落ちぬ  
五センチのきうりの先に釣り用のオモリを吊るす曲らぬやうに  
鉄の柄をがしりと握り土寄せるくづれてはまた盛る畝作り  
鉄にあたるたびに拾ひて投げる小石放物線の先に集まる

同窓会 浦木 妙子\*鳥取

まず服を決めて靴と靴決めて同窓会へいよいよ出発  
会場にピカピカ笑う友溢れ挨拶がわりは子と孫のこと  
エルメスの鞆を持つ手にプラダの指輪彼女の人生いつでも勝ち組  
少しずつ「山田君」へと見えてきた髪の毛増やし痩せさせてみる

金色の粒が次つぎ踊りだし夫はジョッキでグビグビ飲み干す

マダムジュジュ 吉方 明美\*広島

パソコンは友の香りを遠ざける癖字の賀状なつかしくして  
アルバムに若き時代の母を見た「マダムジュジュ」香る昭和の女  
封印せしかの八月を冥土へは持つてゆけぬと語り初めし父  
すじ雲を辿りし先に戦闘機北の国へと向かう任務か  
雑草と呼ばれる庭のドクダミは一輪挿しに居場所を得たり

やっぱりパーカー 中内 佐登美\*高知

百二歳一人暮らしで生き生きと野菜も作る哲代はあちゃん  
G7にゼレンスキー氏来日すスーツで来るか やっぱりパーカー  
生協のカタログめくる手が止まる美味しそうなるお菓子のページで  
梅雨がある訳はチベット高原があるからと知るテレビ番組で  
なぜ顔を隠して報道するのかと納得いかぬ迷惑動画

笑顔 吉村 啓子\*福岡

写真立ての姑の硝子を拭くわれは十男三女の嫁のひとりよ  
ひたすらに栄養注入で眠りいる妹よ戻れ笑顔よ戻れ  
昨日まできびしい顔の人だった株主総会終えての笑顔  
曾孫にはファーストネームでと話し合う曾祖母四人笑顔で承諾  
指名出来ぬへアーカットの店に行くそれでもあの人に当たれと願って